京都検定
京都・観光文化検定試験
京都商工会議所

京都検定 公開テーマよもやま話

第10回

京都検定講演会講師による「よもやま話」。
京都検定を通じて、京都の魅力を再発見しましょう。

講師
山村 純也
株式会社らくたび
代表取締役

第21回 京都検定1級公開テーマ「京の茶室」

茶道の歴史と京の茶室

茶道は室町中期の東山文化の中で、村田珠光が「侘茶」を創始し、それが武野紹鷗、千利休と受け継がれ、完成の域に達したと考えられています。

千利休の菩提寺となった大徳寺の聚光院には、利休をはじめ三千家の墓があり、表千家家元作による「閑隠席」と「桝床席」が残ります。利休の後を継いだ千少庵は、西芳寺に「湘南亭」を造営し、その子である宗旦は侘茶をさらに徹底し、子どもたちに引き継ぐことで三千家を創始しました。

宗旦は利休以来の茶室「不審菴」を宗左に譲って表千家とし、自身はその北側に「今日庵」を造って宗室に譲り、裏千家としました。先に養子に出ていた宗守も千家に戻ると「官休庵」を造り、武者小路千家を興しています。これらはすべて京都の上京にあったことから、「上流（かみりゅう）」と称されました。

一方、「下流（しもりゅう）」と称されたのは、千利休の弟弟子である剣仲紹智が興した藪内流です。西本願寺の保護を得ながら、古田織部から譲られた茶室「燕庵」を今に伝えています。こうして茶道は、安土桃山時代から江戸時代にかけて時の権力者がこぞってたしなみのひとつとし、さらに庶民にも広がって日本文化にしっかりと根を下ろしたのです。その結果、茶室は流行した数寄屋建築の代表事例として量産され、茶室の構成や用材、また使用する茶道具に至るまで、茶人自らの好みによって多くの工夫が施されました。例えば、千利休作の国宝「待庵」を筆頭に、足利義政の「清漣亭」（等持院）、武野紹鷗の「昨夢軒」（黄梅院）、細川三斎の「松向軒」（高桐院）、小堀遠州の国宝「密庵」（龍光院）や「忘筌席」（孤蓬庵）、「八窓席」（金地院）、金森宗和の「庭玉軒」（真珠庵）、「夕佳亭」（金閣寺）、藤村庸軒の「淀看席」（西翁院）など京都に現存する多くの茶室においても、茶人による創意工夫が凝らされ、その好みを後世に伝えています。

第21回京都検定ポスター（正伝永源院「如庵」）

※京都検定では「公開テーマ」に関する問題が各級10問出題されます。

※「京都・観光文化検定試験®」、「京都検定®」およびそのロゴマークは、京都商工会議所の商標です。無断で使用することはできません。

第20回京都検定 G-1グランプリ表彰式を実施しました！

第20回京都検定（7月10日施行）に団体受験されたグループの上位3名の合計点を競う制度「G-1グランプリ」の表彰式を9月20日に実施しました。今回は20団体がエントリー。表彰式では、京都検定検定委員会・粂田 佳幸委員長（彌榮自動車株式会社 代表取締役社長）から表彰楯・表彰状が授与されました。表彰を受けられた皆さま、おめでとうございます。